彼らは二度と会えぬ

神室

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼らは二度と会えぬ

【Ｎコード】
Ｎ２８０４Ｚ

【作者名】
神室

【あらすじ】
『万事屋』
彼らは幸せだった。ただ、一緒にいられることが。
一緒に泣いて、怒って、喜んで、悔んで、笑って・・・・。
いつまでもこんな幸せが続いてほしかった。
ただ、それだけだったのに・・・。

記憶

初めまして。
神室と申します。初めてなんです・・・。
私は色々な小説を読むだけでしたが、書いてみるがなくてですね。
なので、今回は書いてみるに挑戦したいと思います。

しかし、学校でも書くことはありますが何故友達に見せるくらいのものでして。
だから、きっと上手くは書けておりません。

出来れば温かい目で見てやってください。
コメントは来るのかな？悪いコメント受けないかな？いいコメントは？
・・・といつも不安に思ってしまうのですが、また温かい目で直視してあげてください。よろしくお願いします。

悲しき運命

なんで・・・。

なんで僕らがこんな目にあうんだろう？僕らは何もしていないのに。

「おい、新八。」

声がした。万事屋の社長席から。懐かしく、温かい声が。

「・・・・・！！」

振り向いた。

・・・・・・・・いない。

いつも邪魔くさい白銀の天然パーマが。死んだ魚のような目が。

いない。イナイ。坂田銀時が、いない。どこにも。

「・・・・・」

「新八？何やってるネ？」

「神楽ちゃん・・・」

同じ万事屋でバイトしていた夜兎族の少女、神楽。

いつもは明るい声なのに、今日は声が曇っていた。

大きく愛らしい目が真っ赤に腫れていた。

きっと、沢山泣いたのだろう。

僕と同じように。

事件が起きたのは、三日前のことだった。

「はーい、どーも。万事屋で～す」

腐抜けた挨拶で電話に出る万事屋の一人、坂田銀時。

死んだ魚のような目。クリックリの天然パーマ。

こうみえて、彼は、攘夷戦争の時『白夜叉』と恐れられていた男。

しかし、今は万事屋を営んでいる男だ。

数時間前の時

電話に出て、数十分ほど話した後。

「お～い。新八。神楽。仕事依頼だぞ～。」

部屋中に聞こえるよな大きな声で銀時は叫んだ。

返事が返ってこない。

不思議に思った銀時は、いつも神楽と定春が寝ている押入れを覗き込んだ。

垂れ幕になぜか「ピ〇子」とかいてあるだけだった。

「定春～。」

「アンッ！！」

定春だけは家にいたらしく、出てくるや否や銀時の頭に食らいついた。

「離れろって！！今、二日酔いで頭ガンガンしてんだよ！」

定春はしぶしぶ銀時の頭から離れた。

「たっく。おい。神楽はどこ行った？」

すると定春は玄関に置いてあった紙切れをくわえて銀時に見せた。

『公園に行ってくるアル。何かあったら定春と来るヨロシ。』

銀時は呆れた顔で玄関に残ってる神楽愛用の傘を見つけた。

いつも神楽はこの傘をさして陽の光が苦手だから必ず持っていくはず。

それに、今日は陽がカンカン照りだ。

「・・・・・・・・」

銀時は定春に目をやった。

定春は銀時を見つめるだけだった。しかし、なにか言いたげな顔をしている。

「こうなったら・・テレレテッテレ～～！！！（銀時裏声）」

つっこみがいないことを忘れていた銀時は笑ってくれる人もいないので、

「すべったな。あ～あ。なんで一人ですべんなきゃならねーんだ・・・。」

まあいい、と猫だか犬だか何の生物だかわからない模様をしたカラ

クリを取りだした。

「ほら。アンだのキャンだの言ってみろ。」

なにも言わない定春を銀時は軽ーく叩いてみた。

すると、定春にすごい勢いで殴り返された。

『いってーな。ふざけんじゃねーぞ、この腐れ天パ。脳みそも腐ったか？』

「おいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！定春黒い！！腹黒いよ！？！？」

（そういえば紹介していなかった。銀時が使っているカラクリは動物言語翻訳機「難蛇故理ゃ阿」別名「なんじゃこりゃあ」である。

銀時は昨日飲み屋の親父が枝豆の代わりにこれをくれたのだ。）

「意味わかんねーカラクリだなあ。あの親父、枝豆返せこのヤロー」

そうして銀時の神楽探しが始まった。「ねえ、僕はあああああああああ！？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2804z/

彼らは二度と会えぬ

2011年12月26日23時55分発行